言語接触論からとらえるウチナーヤマトゥグチの分類 —起源と変化の過程に着目して—

新垣 李加子

1. はじめに

日本語には全国各地に伝統方言（以下方言）が存在するが、それらの方言は常に一定の形を保つというわけではない。なぜなら、方言同士が接触したり、方言と標準語が接触したりして新しい変種が生まれるからである。沖縄本島では、沖縄方言と標準語の接触を主とし、九州方言や英語などの影響も受けてできたウチナーヤマトゥグチ（沖縄大和口）が生まれている。

ウチナーヤマトゥグチは接触言語の一つであるが、その言語学的位置づけはまだなされていないのが現状である。ロング(2010)は、ウチナーヤマトゥグチを他のさまざまな接触言語と比較した上で、既存の概念のどれにも当てはまらないとし、ウチナーヤマトゥグチの位置づけを再検討しなければならないと述べている。また、ロング・甲賀(2017)では、「接触言語の種類を分類するには文法事項がどの程度単純化されているということや、語彙の意味領域の拡張による多義語化、話者によって母語となっているかどうかなど、多くの要因分類が行われている。その一つはそれぞれの起点変種に由来する単語の多さである」(p. 45-46)とあり、ある一つの接触言語を言語学的に分析するためには、その接触言語内での言語や変種のそれぞれの割合を調べる必要があることがわかる。

以上の問題を踏まえ、本稿の目的は、ウチナーヤマトゥグチという接触言語が言語学上どのように位置づけられるかを定める要素を作ることだとする。そのためにはまず、接触言語の中で一つひとつの項目がどの言語や変種を起源としているかを明らかにしなければならない。したがって本稿では、ウチナーヤマトゥグチの文法・語彙項目が沖縄方言や標準語・九州方言・英語といった言語や言語変種のどれを起源とし、またどのような変化を経ているかを分析し、分類する。

2. 本稿における「ウチナーヤマトゥグチ」

ウチナーヤマトゥグチは、沖縄方言と標準語、そして九州方言や英語などの言語や言語変種が接触してできた言語体系である。標準語との違いに着目すると、ウチナーヤマトゥグチの内部には、〈標準語と一致する部分〉と〈標準語と異なる部分〉がある。先行研究では〈標準語と異なる部分〉だけを指してウチナーヤマトゥグチとよんでいたが、本稿では〈標準語と異なる部分〉だけでなく〈標準語と一致する〉部分も含め、沖縄で用いられている言語体系そのものをウチナーヤマトゥグチとよぶ。〈標準語と異なる部分〉とは、標準語と意味・用法もしくは形式上異なる点がある項目をいい、標準語と意味用法・形式上ともに同一である項目を〈標準語と一致する部分〉という。

例えば、以下の例文で網掛けの部分が、〈標準語と異なる部分〉である。

例文1(資料(1))

A:俺帰ろうかな してたけど、あい、こんだけ釣れるんだったら、あんだ、めったにこんな日ないから (省略)

B:まじでな？一回片付けてたば？

A:ちょっとね、あ分かりましたって

C:して、結果、何時までやってたわけ？

ウチナーヤマトゥグチと九州方言の関係については、高江洲(1994)に「1880年に会話伝習所が設けられ、標準語会話をはなすための訓練がおこなわれるようになり、それにもなって発音の矯正などがおこなわれた。その当時は標準語教育のために九州や他県からおおくの教師がきたようである。」(p. 246)とある。英語については、かりまた(2011)で戦後の米軍占領期に「米軍人の英語を介して採り入れられ、英語の発音を反映した語形であられるという特徴がある。」(p. 24)とあり、例として「アイスワラー(冷水)」「トゥナー(ツナ缶)」などが挙げられている。

地理的な範囲のどこまでをウチナーヤマトゥグチとよぶかも問題である。ウチナーヤマトゥグチに宮古・八重山などの言語変種を含めている研究もあるが、「ウチナー」とはもともと沖縄本島を指し、宮古・八重山などは含まれない(内間・野原2006)。したがって、かりまた(2010)では『ウチナー』が沖縄島(ときにその周辺離島をふくめる)しかさしめさないで、琉球列島各地の言語変種をウチナーヤマトゥグチとよぶのは、琉球諸方言を沖縄方言(ウチナーグチ)と総称するのに似て奇妙であるし、沖縄島に住むマジョリティの周辺マイノリティに対する配慮の欠如が感じられて承認できない」(p. 31)と述べている。本稿でもこの意見を支持し、宮古諸島や八重山諸島で発生した言語変種はウチナーヤマトゥグチとよばない。

また、ウチナーヤマトゥグチは他の言語変種の影響を受けながら、常に変化し続けている。もともと沖縄方言は地域による違いが大きく、その影響を受けたウチナーヤマトゥグチも地域によって差があると考えられる。ウチナーヤマトゥグチは大まかにいうと沖縄方言から標準語への流れの中に位置づけられる言語変種であるので、高年層ほど沖縄方言の影響が強いと考えられる。

なお本稿では、沖縄方言と区別するため、ウチナーヤマトゥグチの(標準語と異なる部分)の項目は平仮名と漢字で記述し、標準語の訳を〈 〉内に示す。

3. 本稿で扱うデータ

本稿でデータとして用いるのは、以下で説明する会話資料と、大城・尚他(2007)やラジオ沖縄(1994)、高江洲(1994)の先行研究、ウチナーヤマトゥグチが母語である筆者の作例である。

会話資料は以下の通りである。

(1) ラジオ番組音声資料(資料(1))

沖縄県うるま市東屋慶名出身・33歳・34歳の5人組音楽バンド「HY」のラジオ番組

「HY のていーちなあ×2」(FM沖縄)

話題は、資料(1)では一人ずつ「トークテーマ」を話すというふうにあらかじめ決められており、内容としては娘の話や趣味の話などがあつた。

(2) 自然談話音声(資料(2))

25歳男性友人二人の会話を録音したものである。二人は中学の同級生で、現在も頻繁に会うほど仲が良い。二人に録音機を渡し、車を運転しながら会話をしてもらつた。二人には「話題は何でもよく、普段のように話してほしい」と伝えた。車を運転しながらの録音だったため周囲の道や施設に関する話題では「こっち」「あっち」の使用が見られ、それぞれの出身大学に関する話題では、「わつたー大学(私たちの大学)」などの使用が多く見られた。

以上の資料(1)、(2)の概要を以下に示す。

表1 資料(1)、(2)の概要

	資料(1)	資料(2)
時間	約20分	約22分
話者数	5人	2人
話者の性別	男性4人、女性1人	男性
話者の年齢	33歳、34歳(同学年)	25歳
話者同士の関係	高校の同級生・仕事仲間	中学の同級生・友人
データ	ラジオ番組の収録音声	車内で録音された音声
話題	娘、趣味(釣り、ドラマ、車)など	運転中に通つた道や施設、共通の知人、出身大学の雰囲気など

4. 分類の基準

ここでは、本稿で行う分類の基準について述べる。

本稿では、ウチナーヤマトゥグチのデータから抽出した〈標準語と異なる部分〉の文法・語彙項目を、「起源の言語・変種」と「変化の過程」の二つに着目して分類を行った。

まず、「起源の言語・変種」に関して、ウチナーヤマトゥグチは主に沖縄方言と標準語が接触してできた言語であるが、九州方言や英語の影響も受けている。本稿で扱うデータには英語起源の項目は見られなかったが、起源に着目した分類を行う際にはこれらの変種のことも考慮しなければならないためその枠を設けた。

次に、「変化の過程」は、意味・用法の変化と形式の変化の二つに分けた。意味・用法の変化には、意味拡張、意味縮小、意味推移や、用法の変化が含まれる。形式の変化には、起点変種とウチナーヤマトゥグチとの音韻の違いによる発音の変化や文法の違いによる変化が含まれる。また理論上は、意味も形式も全く変化していないものや、逆に意

味と形式の両方が変化したものも考えられる。

以上二つの観点から分類するため、本稿では表2の新しい分類を提示する。

表2 ウチナーヤマトゥグチの文法・語彙項目の起源・変化の過程による分類

	意味・用法の変化	形式の変化	変化なし
沖縄方言	A	B	C
標準語	D	E	F
九州方言	G	H	I
英語	J	K	L

接触言語においては二つ以上の言語（変種）の影響を受けている項目がある一方、一つの言語（変種）の内的変化だけが起こってできた項目もある。例えば、ウチナーヤマトゥグチで終助詞的に用いられる「はず」は、形式上は標準語と同じであるが、沖縄方言の意味を受け継いでいるので前者に分類される。本稿ではそれらのどのタイプも分類できるように、縦軸に「起源の言語・変種」、横軸に「変化の過程」を据え、表2を作った。「はず」の場合は、沖縄方言の「ハジ」から形式が変化し、標準語の「はず」から意味が変化したものだと考えられるので、BD型に分類される。

5. 分類の結果と考察

以下で、ウチナーヤマトゥグチのデータの起源と変化の過程による分類の結果を、具体的な文法・語彙項目を挙げながら説明していく。各項目の沖縄方言での意味・用法は国立国語研究所（1969）と内間・野原（2006）によった。

5.1. 沖縄方言が起源の項目

ここでは、一つの言語が起源である項目について見ていく。この分類は、一つの言語の内的変化が起こったものだけということができる。

まず、沖縄方言が起源である項目について述べる。

A型は、沖縄方言が起源で、意味・用法上の変化があつてきたタイプである。形式上の変化はなく、見かけ上は起源である言語と同じである。このタイプには次のような項目が挙げられる。「バー」は沖縄方言では以下の例文のように、「理由・訳」という意味の名詞であるが、ウチナーヤマトゥグチにおいては、名詞ではなく終助詞として用いられている。なお、ウチナーヤマトゥグチにおいて長音のある「ばー」とない「ば」は意味上の区別がないので、ここでは同じものとして扱う。

例文2

チャー バーガ 〈(詰問して) どういうわけか。〉

なんで言うこと聞いたば? 〈なんで言うこと聞いたの?〉

B型は、沖縄方言が起源で、その形式が変化してできたタイプである。このタイプの例として、「君たち」という意味の「やったー」がある。沖縄方言での二人称代名詞は「ツヤー[ʔja:]」であり、その複数形は「イッター[iQta:]」である。単数形と複数形の対応は、標準語のように単純に複数を表す接尾辞が付いているだけではなく、代名詞そのものの形も変わっている。しかし、ウチナーヤマトゥグチでは、単数形に複数の接尾辞が付いただけの「やったー[jaQta:]」という形式になっている。以下に沖縄方言・ウチナーヤマトゥグチ・標準語の二人称代名詞を示す。

表3 一人称・二人称代名詞の沖縄方言・ウチナーヤマトゥグチ・標準語の対応表
(沖縄方言は内間・野原 (2006) より)

沖縄方言	ウチナーヤマトゥグチ	標準語
ツヤー	やー	君
イッター	やったー	君たち

AB型は、沖縄方言が起源で、意味・用法と形式の両方が変化してできたタイプである。「でーじ」は、沖縄方言では「大変」や「大ごと」という名詞的な用法で用いられているが、ウチナーヤマトゥグチではその他に、「とても」という、副詞的な用法でも用いられている。これだけを考えれば、沖縄方言から意味変化が起こっているのでA型に分類されそうだが、実は沖縄方言で「デージナ〈とても〉」という副詞があることに注意したい。これを考慮に入れると、「でーじ」は「デージナ」から「ナ」が外れた、つまり形式上の変化が起こったと見ることができる(表4)。したがって、「でーじ」は、沖縄方言が起源で、意味・用法と形式の両方が変化してできたAB型に分類される。

表4 「でーじ」の沖縄方言・ウチナーヤマトゥグチへの変化

沖縄方言	ウチナーヤマトゥグチ
デージ ナトーン 〈大変 なってる〉	意味変化 でーじ強い 〈とても強い〉
デージナ チューサン 〈とても強い〉	形式変化

C型は、沖縄方言を起源とし、意味・用法も形式も変化をしていないタイプである。「ごーやー(苦瓜)」、「わったー(私たち)」などがこのタイプに分類される。

5.2. 標準語が起源の項目

ここでは、標準語が起源のタイプについて述べる。

D型は、標準語が起源で、意味が変化したタイプである。例えば、「内地」という語はもともと「外地に対する、本国」という意味であったが、ウチナーヤマトゥグチにおいては「日本の、沖縄県外の場所」という意味に変わり現在でも使われている。

E型は、標準語が起源で、形式が変化したタイプである。例えば、形容動詞の活用が形容詞の活用と同じようになっていることが挙げられる。標準語では、形容詞と形容動詞はそれぞれ異なる活用をするが、ウチナーヤマトゥグチにおいて、形容動詞が形容詞と同じ活用をする現象が見られる。このような現象がある形容動詞には、「きれいな」「上等な」「好きな」などがあり、また標準語で形容詞としては用いられない「ピンク」という語も、「ピンクい」という形容詞的に用いられ、活用も形容詞と同じである。このような現象は、外国語を母語とする日本語学習者の中間言語にも見られる。以下に、標準語・ウチナーヤマトゥグチの形容詞・形容動詞の活用の比較を表で示す。

表5 標準語・ウチナーヤマトゥグチの形容詞・形容動詞の活用の比較

	標準語・ウチナーヤマトゥグチの形容詞	ウチナーヤマトゥグチの形容動詞	標準語の形容動詞
現在・未来	おいしい	きれいだ	きれいだ
現在(否定)	おいしくない	きれくない	きれじゃない
過去	おいしかった	きれかった	きれだった
過去(否定)	おいしくなかった	きれくなかった	きれじゃなかった

DE型は、標準語が起源で、意味・用法、形式の両方が変化したタイプである。例えば、副詞「しに」が挙げられる。会話資料から得られた以下の例文のように、形容詞や動詞を修飾して程度が著しいことを表す語であるが、沖縄方言には語源と思われる語は見当たらない。おそらく、標準語の「死ぬほど」が変化したものだと思う。

例文3

しに長い しに遠くの山 しに怒ってる しに涙流して 会話資料(1)(2)

5.3. 二つ以上の言語・変種が起源の項目

ここでは、二つ以上の言語・変種が起源であるタイプについて見ていく。これらのタイプは一つの言語の内的変化だけではなく、二つ以上の言語が影響を及ぼし合う過程によりできたものである。

AD型は、沖縄方言と標準語の両方から意味が変化したタイプである。終助詞の「さ」がこのタイプである。新垣(2016)では、ウチナーヤマトゥグチの終助詞「さ」の用法が

中年層話者と若年層話者の間で異なることを述べている。具体的には、例文4の依頼用法や例文5の勧誘用法は主に若年層に使われるこれらの用法は、沖縄方言と標準語のどちらとも異なる新しい用法である。なお、ウチナーヤマトゥグチにおいて長音のある「さー」とない「さ」は意味上の区別がないので、ここでは同じものとして扱う。

例文4 (依頼用法)

A: えー、早くして。〈ねえ、早くして。〉

B: ちょっと待ってさー。もう準備終わるから。

〈ちょっと待ってよ。もう準備終わるから。〉 (新垣 2016)

例文5 (勧誘用法)

A: 修学旅行、行かんこうかな。〈修学旅行、行かないでおこうかな。〉

B: えー、せっかくだから行こうさー。

〈えー、せっかくだから行こうよ。〉 (新垣 2016)

BD型は、沖縄方言と標準語を起源としており、沖縄方言から形式が変化し、標準語から意味が変化したタイプである。例えば、文末に用いられる「はず」は、沖縄方言と標準語両方の要素を持っているので、このタイプに当てはまる。沖縄方言でも「ハジ」という語があるが、標準語より意味範囲が広く、標準語の「だろう」と同じように、内容に根拠がなく確実度が低い場合にも用いられる。以下にウチナーヤマトゥグチの例文を示す。ウチナーヤマトゥグチの「はず」は、この沖縄方言の意味をそのまま受け継いでおり、確実度が低いことを表す「たぶん」と共に使われている。

例文6

A: あの店まだ開いてるかなー。

B: もう遅いから、たぶん閉まってるはずよ。 (大城・尚 2007 p26)

ウチナーヤマトゥグチの「はず」の沖縄方言・標準語との比較を以下の表に示す。

表6 ウチナーヤマトゥグチの「はず」の沖縄方言・標準語との比較

沖縄方言	ウチナーヤマトゥグチ	標準語
ハジ	はず	はず
		だろう

BE型は、沖縄方言と標準語の両方から形式が変化したタイプで、いわば沖縄方言と標準語の複合語である。このタイプの例には、沖縄方言の動詞「シカム (驚く)」と標準語の「坊」が合わさってできた「しかぼー (すぐに驚く子)」や、沖縄方言でぼうっとする

様子を表す表現の「トゥルバイカーバイ」と標準語の五段動詞活用部分「る」が合わさってできた「とうるばる」がある。前者は沖縄方言と標準語の内容形態素が、後者は沖縄方言の内容形態素と標準語の機能形態素が合わさったものである。

BDH型は、標準語から意味が変化し、沖縄方言と九州方言から形式が変化したタイプである。このタイプの例に、能力可能の「きれる」がある。チナーヤマトウグチの可能表現には、標準語にはない能力可能と状況可能の区別がある。井上・鍵水編(2002)によると、能力可能は「まだ子どもなので着ることができない」のように本人の能力に左右されて可能になる時に使う表現、状況可能は「この服は縮んだので着ることができない」のように、周囲の状況に左右されて可能になるときに使う表現であり、この区別は西日本各地や東北各地に存在する。ウチナーヤマトウグチの能力可能は、動詞の語幹に「きれる」(否定は「きれん」という助動詞がついた形で表され、状況可能は、標準語の可能表現と同じ形式で表される。したがって、標準語では見られない次のような表現が見られる。

例文7

洋子は、英語は話しきれんよ。(洋子は、英語は話せないよ。) (大城・尚 2007)

ウチナーヤマトウグチにおいてこの二つが区別されるのは、沖縄方言でも区別されるからである。沖縄方言では、「カチウースン〈書くことができる〉」のように能力可能は「ウースン」、「ウヌ ゴーヤーヤ カマリーン〈このゴーヤーは食べられる〉」のように状況可能は「リーン」という助動詞で表される。

では、なぜウチナーヤマトウグチでは能力可能が「きれる」という形で表されるのだろうか。これについて、永田(1996)では、全国共通語からの借用だと述べられ、ウチナーヤマトウグチの能力可能「きれる」「きれん」は標準語の補助動詞「きれる」からきているとの立場である。そして、「きれる」が標準語(本文では「全国共通語」)からの借用であると結論づけた理由として、九州方言には「キル」はあっても「キレル」はないことを挙げている。

本稿では、ウチナーヤマトウグチの能力可能「きれる」の形式がどの言語変種が起源で、どのように変化してできたかについて、もう少し深く考えてみたい。まず考えられる第一の説(仮説①)は、上述の先行研究が支持している、標準語からの「きれる」という補助動詞の影響である。標準語の「きれる」は「食べ物が多すぎて食べきれない」のように、「完全に～し尽くす」「最後まで～できる」という、ある範囲がありそこに到達し得るという意味を表す。しかし、ウチナーヤマトウグチでは例5-6の「英語を話しきれん」というように、個人の能力の有無を表す。つまり、標準語の補助動詞「きれる」の意味が拡大され、ウチナーヤマトウグチの「きれる」になったという仮説である。

第二の説(仮説②)は、九州方言の能力可能の助動詞「キル」とその否定形「キラン」からの影響である。前述のように九州には能力可能と状況可能の区別がある方言

が多い。先行研究からわかる通り、沖縄では教師などに九州地方出身者が多かったので、ウチナーヤマトゥグチには少なからず九州方言の影響が見られる。この場合は、九州方言の能力可能の助動詞「キル」が「きれる」に、「キラン」が「きれん」に変化したということである。この変化を、動詞「書く」に詳しく見てみると、次のようになる。可能を表す形態素に下線を引いた。

以下で分かるように、九州方言の場合、可能にするためには「キル」が付くが、ウチナーヤマトゥグチの場合、それ以外にも可能を表す「e」が挿入され、二重の可能表現となっていることが分かる。

	能力可能(九州方言)		能力可能(ウチナーヤマトゥグチ)
〈肯定形〉	kaki/ <u>kir</u> /u	→	kaki/ <u>kir</u> /e/ru
〈否定形〉	kaki/ <u>kir</u> /an	→	kaki/ <u>kir</u> /e/n

これは、ウチナーヤマトゥグチにおける以下のような辞書形と状況可能の違いと同様である。

	辞書形(ウチナーヤマトゥグチ)		状況可能(ウチナーヤマトゥグチ)
〈肯定形〉	kak/u	→	kak/e/ru
〈否定形〉	kak/an	→	kak/e/n

すなわち、九州方言の能力可能の助動詞「キル」は、ウチナーヤマトゥグチに取り込まれる過程で、さらに可能の要素を追加させた形になったのではないだろうか。

第三の仮説(仮説③)は、以上の二つの仮説がどちらも起こったという説である。もともと沖縄方言では能力可能と条件可能という二つの異なった概念があったが、沖縄方言を母語とする人々が標準語を習得する際に、二つの可能の概念を表すちょうどよい形式がなかった。同時に九州方言の能力可能「キル」と標準語の補助動詞「きれる」の両方を耳にし、その両方ともを取り入れて、「きれる」というウチナーヤマトゥグチ独自の形が生まれたのではないか、という説である。以上の三つの説をまとめると以下の表のようになる。

表7 ウチナーヤマトゥグチの能力可能表現「きれる」の成立過程の仮説

	起点変種	変化の過程
仮説①	標準語「きれる」	意味拡張(範囲に到達→能力可能)
仮説②	九州方言「キル」	形式変化 kaki/ <u>kir</u> /u → kaki/ <u>kir</u> /e/ru kaki/ <u>kir</u> /a/n → kaki/ <u>kir</u> /e/n

		二重可能
仮説③ (仮説①+仮説②)	標準語「きれる」	意味拡張 (範囲に到達→能力可能)
	九州方言「キル」	形式変化 kaki/ <u>kir</u> /u → kaki/ <u>kir</u> /e/ru kaki/ <u>kir</u> /a/n → kaki/ <u>kir</u> /e/n 二重可能

仮説①では、意味が変化している。そもそも、九州方言の能力可能「キル」と標準語の補助動詞「きれる」も、意味上の変化が起こり二つの違う意味を持つ言葉に分歧したと考えられるので、ウチナーヤマトゥグチが標準語の「きれる」を能力可能を表す語として取り入れた際にも同じ変化が起こったと考えられる。

仮説②では、もともと可能の意味を持っている「キル」にさらに可能の要素が加わり、二重可能になっている。このように、同じ意味を表す要素が重ねられる例は実は多い。もともと複数を表す接尾辞が付いている「子供」に、さらに複数を表す接尾辞「達」がついた「子供達」という表現や、二重敬語などがその例である。

このように考えると、仮説①と仮説②はどちらもあり得る。ウチナーヤマトゥグチが成立した状況を考えて、沖縄の人々は標準語を習いながら、九州方言を耳にする機会も多かったと考えられるので、本稿ではどちらか一つの現象だけではなく二つの現象が起こったという仮説③の立場をとることとする。

6. まとめ

本稿では、ウチナーヤマトゥグチの文法・語彙項目が沖縄方言や標準語・九州方言・英語といった言語や言語変種のどれを起源とし、またどのような変化を経ているかを分析し、分類した。その分類をまとめると、以下の表のようになる。

今回扱ったデータでは、すべての分類の文法・語彙項目は見つからなかったが、今後、他のデータを収集すれば見つかる可能性もある。次稿で明らかにしたい。

表8 ウチナーヤマトゥグチの項目の起源と変化の過程に着目した分類
〈 〉内は標準語の意味もしくは用法

起点変種	起点変種	タイプ (変化の過程)	項目
一つ	沖縄方言	A型 (沖縄方言→意味・用法変化)	ば 〈の〉
		B型 (沖縄方言→形式変化)	いったー 〈君たち〉
		AB型 (沖縄方言→意味・用法、形式変化)	でーじ 〈とても〉

		C型(沖縄方言→変化なし)	ごーやー〈苦瓜〉 わったー〈私たち〉
	標準語	D型(標準語→意味・用法変化)	内地(沖縄県外)
		E型(標準語→形式変化)	きれかった(綺麗だった)
		DE型(標準語→意味・用法、形式変化)	しに(とても)
二つ	沖縄方言・標準語	AD型(沖縄方言・標準語→意味変化)	さ(依頼・勧誘)
		AE型(沖縄方言→意味変化、標準語→形式変化)	例なし
		BD型(沖縄方言→形式変化、標準語→意味・用法変化)	はず(だろう)
		BE型(沖縄方言・標準語→形式変化)	しかばー(すぐに驚く子) とぅるばる(ぼうっとする)
		ABE型(沖縄方言→意味・用法変化・形式変化、標準語→形式変化)	ちむい(かわいそう)
三つ	沖縄方言・標準語・九州方言	BDH型(沖縄方言・九州方言→形式変化、標準語→意味変化)	きれる・きれん(能力可能)

このように、ウチナーヤマトゥグチの〈標準語と異なる部分〉の項目を起源と変化の過程に着目して分類すると、様々なタイプがあることがわかる。ウチナーヤマトゥグチは沖縄方言から標準語に移行する過程で生まれた言語体系であると言っても、その中にある一つ一つの現象は単純に沖縄方言と標準語の間にあるわけではなく、E型の形容動詞の活用が形容詞の活用と同じようになる現象のような、中間言語と共通する特徴も見られた。また本稿では九州方言という大まかな用語を用いたが、ウチナーヤマトゥグチが具体的に九州方言のどの方言の影響を受けているかの検討が必要である。今後の課題としたい。

今後は、本稿で行った分類をもとに、ウチナーヤマトゥグチの言語学上の位置づけを考えていきたい。

参考文献

- 新垣李加子(2016)「若年層におけるウチナーヤマトゥグチの終助詞『サ』の使用実態」
『バリ日本語教育国際大会予稿集』全3頁
- 井上史雄・鎌水兼貴(2002)『辞典(新しい日本語)』東洋書林
- 上村孝二(1983)「1 九州方言の概説」『講座方言学9—九州地方の方言—』図書刊行会

- 内間直仁・野原三義(2006)『沖縄語辞典—那覇方言を中心に—』研究社
- 大城朋子・尚真貴子他(2007)『日本語バイリンガルへのパスポート—沖縄で日本語教師をめざすあなたへ—』沖縄国際大学日本語教育教材開発委員会
- かりまたしげひさ(2010)「琉球クレオロイドの性格」石原昌英・喜納育江・山城新編『沖縄・ハワイ—コンタクト・ゾーンとしての島嶼』彩流社
- かりまたしげひさ(2011)「琉球列島における言語接触研究のためのおぼえがき」『琉球の方言』36, 沖縄文化研究所
- 国立国語研究所(1969)『国立国語研究所資料集5 沖縄語辞典』大蔵省印刷局
- 高江洲頼子(1994)「ウチナーヤマトゥグチ—その音声、文法、語彙について—」『沖縄言語センター研究報告3 那覇の方言 那覇市方言記録保存調査書I』p245-289
- 高江洲頼子(2004)「ウチナーヤマトゥグチ—動詞のアスペクト・テンス・ムード—」『日本語のアスペクト・テンス・ムード体系—標準語研究を超えて—』ひつじ書房
- 永田高志(1996)『地域語の生態シリーズ 琉球で生まれた共通語琉球』おうふう
- 本永守靖(1979)「沖縄における児童生徒のことば」『琉球大学教育学部紀要』(23)p37-47
- ラジオ沖縄「前田すえこのいいことありそうウィークエンド」沖縄体験隊編(1994)『笑う!うちなーぐち FAX 小全』ボーダーインク
- 本永守靖(1984)「南島方言と国語教育」『講座方言学 10—沖縄・奄美の方言—』国書刊行会
- ロング、ダニエル(2010)「言語接触論から見たウチナーヤマトゥグチの分類」『人文学報』(428)p1-30, 首都大学東京都市教養学部人文・社会系
- ロング、ダニエル・甲賀真広(2017)「接触言語の分類に関する量的研究—起点変種の割合を通して—」『人文学報』(513-7), 首都大学東京都市教養学部人文・社会系

(あらかき りかこ・首都大学東京大学院博士後期課程)